



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

母からの負情動・身体感覚否定経験が攻撃性に及ぼす影響：家庭内暴力傾向との関係

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福泉,敦子, 大河原,美以 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2309/132593 |

母からの負情動・身体感覚否定経験が攻撃性に及ぼす影響

—— 家庭内暴力傾向との関係 ——

福 泉 敦 子*・大河原 美 以**

教育心理学講座

(2012年9月10日受理)

1. 問題意識と目的

本研究は、母からの負情動・身体感覚否定経験が青年期の攻撃性にどのような影響を及ぼすものなのかを検証するものである。大河原²⁰⁾ 21) 22) 23) 24) は、これまでの臨床実践から、さまざまな子どもの心理的問題の根底に、感情制御の発達不全があることを指摘してきた。母からの負情動・身体感覚否定経験とは、感情制御の脳機能における脆弱性に影響を与えるコミュニケーション様式であり、母子間の愛着システム不全を生み出す関わりである^{25) 26) 27) 28)}。本論では、感情制御の発達不全モデルを量的研究により実証するために、母からの負情動・身体感覚否定経験がどのように青年期の攻撃性に影響を与えるのか、家庭内暴力傾向を指標として検証する。

1. 1. 家庭内暴力の背景

家庭内暴力をする子どもは必ずしも「非行少年」であるとは限らず、いわゆる「よい子」と呼ばれる子どもが、ある日突然キレて暴力をふるうことが多いとされている。青木¹⁾によると、「キレるといのは、自分の中でタガが外れたり、不愉快な刺激を受けた場合、抑止力がなくなり、理性的な行動がとれなくなって発作的な情動がおこる現象に対して使われている表現であり」、キレることの特徴として、「怒り」をコントロールする力が弱いことが示されている。そして、子どもの暴力は、子どもの素直な感情表現が抑圧されることで抱いた怒り感情の変形であり、抑圧されてきた怒りの表現として現れる攻撃性は原因がわからない

ため、攻撃の対象が定まらず親や物への八つ当たりや、自分自身へ向けられることがある³⁴⁾。川畑¹⁴⁾は、家庭内暴力をふるう子どもの心理的特徴として、「内心には強い怒りを抱えて」おり、「同時に、甘えたい(受け容れて欲しい)という欲求とそれを拒まれるのではないかという強い不安も抱いている」と述べ、これらの「アンビバレント(両価的)な感情を言葉で表現することが苦手であり、暴力という形でしか表現できない」ことを示している。このように、子どもの感情表現の仕方は、子どもと他者とのコミュニケーションにおいて、子どもの感情がどのように扱われてきたかということと関係している。否定的に扱われてきた場合には抱いた感情は抑圧され、適切な感情の表現を身につけることができないので、その抑圧されてきた感情が制御できなくなったときには、八つ当たりなどの攻撃行動として表出されると考えられる。

また、清永¹⁵⁾によると、自己感覚の喪失は、他者感覚や社会的規範軸を喪失し、衝動的に(個人的感情を無差別の対象に向かって突発的・一時的に表出するような)暴力的な犯行に至る。南澤・山崎¹⁸⁾は、問題行動の加害当事者の心理的側面について、高校生の暴力行為事例の分析研究することを通して、「問題行動の加害者側の生徒は、自己価値に対する認識と評価が一般の生徒より低い」ことを示している。榎木⁸⁾によると、自分とはどのような存在なのかという自己認知は、環境との相互作用を通して形成されるものであるという。細田・田蔦¹¹⁾は、他者とはどのような存在なのかという他者認知も、周囲の人々との関わり合いの中で形成されるものであり、周囲から認められ、

* 足立区子ども家庭支援センター (120-0004 足立区東綾瀬1-5-17)

** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

必要なときに助けを求めることができる子どもは「自分は自分であっていいんだ」と感じることができていると言う。つまり、他者とのコミュニケーションを通して、子どもは自己の存在を知るものであり、自己の存在を肯定的に捉えることができないと、暴力行為などにつながる可能性があるといえる。

1. 2. 感情制御と攻撃の置き換え

「攻撃行動は、挑発の源泉に対する報復としての直接的攻撃の形態で表出されることがある一方で、挑発の源泉ではない他の対象に対するやつ当たりの形態で表出されることもある³²⁾。淡野³⁰⁾のレビューによると、個人が挑発事象を経験した時に、挑発の源泉ではない他の対象に表出する攻撃は、置き換えられた攻撃 (displaced aggression) と定義される^{7) 12)}。例えば、上司から説教を受けた会社員が家に帰って妻にきつくあたるといった攻撃行動が置き換えられた攻撃となり、また、誘発されて表出する置き換えられた攻撃のことを TDA (triggered displaced aggression) という⁶⁾。そして、TDA 理論では、挑発事象と誘発事象の間の認知活動として、挑発事象で喚起された怒りについての反すうが仮定されている。個人が挑発事象を経験すると、連合ネットワーク内の攻撃に関する感情、認知および覚醒の活性化が維持され、後の攻撃行動の表出可能性を増加させることとなり、個人がこの状態において誘発事象を経験すると、TDA を表出する。

TDA 理論に基づき、Denson, Pedersen, & Miller⁵⁾は、置き換えられた攻撃に従事しやすい傾向の個人差を測定する攻撃の置き換え傾向尺度 (Displaced Aggression Questionnaire ; DAQ) を作成している。DAQ の下位尺度は、連合ネットワーク内の攻撃に関する感情、認知および覚醒に対応付けるかたちで以下の3つで構成されている。

[1] 感情的要素として“怒りの反すう (angry rumination)”：挑発事象によって生じた怒りについて反すうを行う傾向を測定する。

[2] 認知的要素として“報復の企図 (revenge planning)”：挑発事象について悪意を抱き、報復を企てる傾向を測定する。

[3] 行動的要素として“攻撃の置き換え (displaced aggression)”：挑発の源泉ではない他の対象に攻撃を加える傾向を即測定する。

Denson et al.⁵⁾が、家庭内暴力尺度 (The Abuse Within Intimate Relationships Scale ; Borjesson²⁾) について、挑発の源泉ではない他の対象に対する置き換えられた攻撃特性を測定する攻撃の置き換え傾向尺度

(DAQ) と、挑発源泉に対する直接的な攻撃特性を測定する直接的攻撃傾向尺度 (Buss and Perry Aggression Questionnaire ; BAQ ; Buss & Perry⁴⁾) の影響を検討した結果、直接的攻撃傾向と比較して、攻撃の置き換え傾向が家庭内暴力をより強く予測していることが示された。また、淡野³⁰⁾の日本語版尺度研究においても、直接的攻撃傾向と比較して攻撃の置き換え傾向が家庭内言語的暴力をより強く予測していることが示されている。つまり、「置き換えられた攻撃は、日本語でいうやつ当たりに相当する」ものであり³¹⁾、このような攻撃行動が家庭内暴力と関係すると考えられる。

1. 3. 自己存在感の希薄さ

人が人として生きていくには自分は他者とは違った独自の存在であるという感じが持てなくてはならない。子どもは成長過程で身近な人々との同一化を通して、少しずつ人格を作り、思春期に至って自我の目覚めが起き、そしてやがて親から離れて社会へと出て行く。そうした子どもの成長にとって大切な同一化の対象はまず母親、父親である。

喜怒哀楽を共にするなどの「心の交流」が乏しく、情緒的、精神的な親子関係が希薄であると、親が子どもの同一化の対象にならず、そのため、愛情豊かに育てられているように見えながらも、親からの心の支えが得られずに、自分の存在感を持てずに漠然とした不安の中で年齢を重ねていくということが指摘されている³³⁾。

湯川³⁵⁾のレビューによると、日常生活においてある存在 (現象、対象) を認識 (経験、直感) するにあたり、時間と空間の観点をその基礎としており¹⁶⁾、自己という存在を認識する場合も同様だとすれば、自己認識には大きく対時間的な次元と対空間的な次元があると仮定できる。対時間的な次元での自己認識は、歴史的な存在であることに由来し、すなわち、記憶によって想起される過去の自己、現在生きていると認知される自己、そして、未来に想像される自己のように、過去・現在・未来の時間軸に沿って自己を認識している。Markus & Nurius¹⁷⁾も、現在ここにある自己を動機づける (現実自己以外の) 自己として、過去の自己と未来の自己を含めた「可能自己」の概念を提唱している。このように、対時間的次元での自己存在の認識とは、現実自己や可能自己のような自己の過去・現在・未来に関する展望を基盤とする自己把握である。一方、今現在の空間的な自己の把握は、厳密に考えると、内的な (internal) 認識と外的な (external) 認識の2次元に分けられ、これは、James¹³⁾の「知る主体

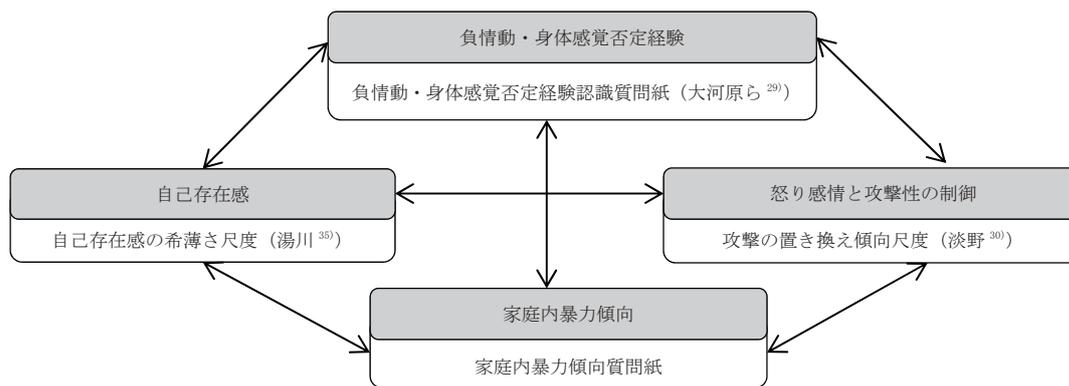


図1 家庭内暴力の背景にある心理的要因に関する仮説

としての自己（主我）」と「知られる客体としての自己（客我）」やBuss³⁾の自己意識理論における「私的自己」と「公的自己」の考えに対応する。すなわち、前者の内的・主体的・私的な自己認識とは、対自的次元の自己把握であり、個人的な内面世界に対する注目や思考を基盤としており、後者の外的・客観的・公的な自己認識とは、対他次元での自己把握で、周囲の他者や社会との関係を基盤としている。落合¹⁹⁾は、孤独感の規程因を分類・整理するなかで、その心理的（内的）条件として「対他次元（人との関係に関する次元）」「対自次元（自己のあり方の意識に関する次元）」「対時間的展望の次元（時間的展望に関する次元）」の3次元があるとしている。

湯川³⁵⁾はこれらの自己認識に存在理由や存在価値といった価値的な側面が付随した、自己に関する価値レベルの概念が「自己存在感」であり、「自分自身に関する肯定的な存在理由もしくは存在価値についての感覚」と定義されるとしている。そして、個人的な内面世界に対する注目や思考を基盤とする次元の「対自次元」、周囲の他者や社会との関係を基盤とする次元の「対他次元」、自分の過去・現在・未来に関する展望を基盤とする次元である「対時間的次元」の3つの下位尺度で構成された自己存在感の希薄さ尺度（Diminished Sense of Self-Existence Scale：DSSS）を作成し、自己存在感の希薄さと暴力や攻撃性との関連を検討し、敵意や怒りなどの非表出性の（内的な、潜在的な）攻撃との関連を示している。

1. 4. 仮説と目的

本論の目的は、感情制御の発達不全モデル^{25) 26) 27) 28)}を量的研究により実証するために、母からの負情動・身体感覚否定経験がどのように青年期の攻撃性に影響を与えるのかについて、家庭内暴力傾向を指標として検証することである。先行研究から、家庭内暴力など

の攻撃行動には、子どもの感情制御の困難状態や自己存在感の低さ、攻撃の置き換えが関係していることが明らかになった。

これらの要因は、図1に示したような相互作用を経て、家庭内暴力に至るのではないかと仮説することができる。各要因を測定する質問紙として、「負情動・身体感覚否定経験認識質問紙（大河原ら²⁹⁾」「攻撃の置き換え傾向尺度（淡野³⁰⁾」「自己存在感の希薄さ尺度（湯川³⁵⁾」を使用し、「家庭内暴力傾向」を測定する質問紙は自作する。

本論では、質問紙調査により、（1）図1の仮説を統計的に検証するとともに、（2）自己存在感に焦点をあてて、家庭内暴力に至らない場合の要因（抑制要因）を明らかにする。

2. 調査研究

2. 1. 質問紙構成

(1) フェイスシート

実施日、性別、年齢の記入を求めた。

(2) 家庭内暴力傾向質問紙

家庭内暴力とは、家庭内でふるわれた暴力の総称のことで、親から子ども、子どもから親、同胞間などと組み合わせは様々であるが、日本における子どもから親への暴力は、米国で“Parent Abuse”と報告された日本特有の社会現象であると考えられている¹⁰⁾。そして、子どもの家庭内暴力の内容は、以下の3つである。

〔1〕身体的暴力：身体に加えられる暴力で、足で蹴る、殴る、突き飛ばす、物を投げる、刃物を突きつけたりすることである。相手に対して打撲や骨折などを負わせて、暴力を受けた者に相当の打撃を与える。

〔2〕心理的暴力（または精神的暴力）：言葉による暴力で、暴言を吐き、執拗に嫌がらせをしたり、大声

表1 家庭内暴力経験および願望質問紙 (各9項目)

| |
|---------------------------|
| 1 家族を叩いたり、蹴ったりする |
| 2 家族に物を投げつける |
| 3 家族の身体を強くつかんだり、突き飛ばしたりする |
| 4 家族に命令したり、脅したりする |
| 5 家族を批判したり、嫌がらせをしたりする |
| 6 家族に暴言を吐いたり、大声で怒鳴ったりする |
| 7 家の中の物を殴ったり、蹴ったりする |
| 8 家の中の物を壊す |
| 9 家の中を荒らす |

表2 負情動・身体感覚否定経験認識質問紙 (13項目) (大河原ら²⁹⁾)

| |
|--|
| 1 私が不機嫌に怒ると、その理由を説明しても、母は私を受け入れてはくれなかった (だろう)。 |
| 2 私が不機嫌に泣くと、その理由を説明しても、母は私を受け入れてはくれなかった (だろう)。 |
| 3 私が不機嫌にぐずぐずすると、その理由を説明しても、母は私を受け入れてはくれなかった (だろう)。 |
| 4 私が不機嫌にイライラすると、その理由を説明しても、母は私を受け入れてはくれなかった (だろう)。 |
| 5 私が不機嫌に不安を訴えると、その理由を説明しても、母は私を受け入れてはくれなかった (だろう)。 |
| 6 私が「いやなおいだ」と感じていて、母はそう感じていない時、私が「いやなおいだ」と言うと、母は「そんなことはない。いやなおいなんかないでしょ」と言った (だろう)。 |
| 7 私が「変な味だ」と感じていて、母はそう感じていない時、私が「変な味だからいやだ」と言うと、母は「そんなことはない。変な味なんかないでしょ」と言った (だろう)。 |
| 8 私が「気分が悪い」と感じていて、母は私 (あなた) の気分が悪いとは感じていない時、私が「気分が悪い」と言うと、母は「そんなことはない。気分なんて悪くないでしょ」と言った (だろう)。 |
| 9 私が「おなかが痛い」と感じていて、母は私 (あなた) のおなかが痛いとは感じていない時、私が「おなかが痛い」と言うと、母は「そんなことはない。おなかなんて痛くないでしょ」と言った (だろう)。 |
| 10 私が「ねむい」と感じていて、母はそう感じていない時、私が「ねむくていやだ」と言うと、母は「そんなことはない。ねむくなんかないでしょ」と言った (だろう)。 |
| 11 私が「暑い」と感じていて、母はそう感じていない時、私が「暑くていやだ」と言うと、母は「そんなことはない。暑くなんかないでしょ」と言った (だろう)。 |
| 12 私が「熱っぽい」と感じていて、体温計は平熱を示しているとき、私が「熱っぽくて具合が悪い」と言うと、母は「そんなことはない。熱なんかないでしょ」と言った (だろう)。 |
| 13 私が「足が痛い」と感じていて、見たところ何も異常がないように見えるとき、私が「足が痛い」と言うと、母は「そんなことはない。足なんか痛くないでしょ」と言った (だろう)。 |

で怒鳴り散らしたり、わめき続けたりすることである。これらの行動は親を心理的に参らせる。

〔3〕器物損壊：物にあたることもあり、その対象には家のなかにあるすべてのものに向けられる。家財道具を壊す、ガラスを割る、壁を蹴る、火をつけるなどがある。

これらの家庭内暴力の内容を元に、様々な家庭内での身体的暴力、心理的暴力、器物損壊の暴力場面を想定し、質問項目を選定した(表1)。この質問項目に対してどの程度経験したことがあるかを問う質問紙を「家庭内暴力経験質問紙」とし、どの程度したいと思ったことがあるかを問う質問紙を「家庭内暴力願望質問紙」とする質問紙を作成。各項目を6件法で評定。

(3) 負情動・身体感覚否定経験認識質問紙

大河原ら²⁹⁾が作成した質問紙で、様々な負情動と身体感覚を母親に対して表出する場面を想定し、その際の母親の反応がどの程度否定的なものだったと認識しているかを測定。負情動否定経験因子(項目1から5)と身体感覚否定経験因子(項目6から13)の2因子からなる。各項目を5件法で評定(表2)。

(4) 攻撃の置き換え傾向尺度(DAQ)

淡野³⁰⁾が作成したDAQ日本語版尺度で、個人が挑発事象を経験したときに、挑発の源泉ではない他の対象に表出する攻撃を測定する。

挑発事象によって生じた怒りについて反すうを行う傾向を測定する「怒りの反すう」10項目(怒ったとき、長い間自分の思考や感情のことばかり考える傾向

がある・過去に私を怒らせた事について考えるだけで、また怒りがこみあげてくる、他)、挑発事象について悪意を抱き、報復を企てる傾向を測定する「報復の企図」11項目(人に仕返しをしている状況を想像することがある・誰かが私を怒らせた時、どうやってその人に仕返しをするかを考えずにはいられない、他)、挑発の源泉ではない他の対象に攻撃を加える傾向を測定する「攻撃の置き換え」10項目(仕事や学校で嫌な事があつたら、家族や友人に対して攻撃的になることがある・誰かもしくは何かが私を怒らせた時、他の人にやつ当たりすると思う、他)で構成されている。各項目を5件法で評定。

(5) 自己存在感の希薄さ尺度(DSSS)

湯川³⁵⁾の作成した、自己存在感を「自分自身に関する肯定的な存在理由もしくは存在価値についての感覚」と定義し、自己に関する価値的側面からの認識が、どのくらい希薄なものであるということを示す概念。

個人的な内面世界に対する注目や思考を基盤とする次元の「対自的次元」13項目(自分は価値のある人間だと思う*・自分には、自慢できるところがあまりない、他)、周囲の他者や社会との関係を基盤とする次元の「対他的次元」11項目(自分は他人に必要とされている人間だと感じる*・自分を必要としてくれている人間などいない、他)、自分の過去・現在・未来に関する展望を基盤とする次元である「対時間的次元」13項目(自分の未来は明るいと思う*・これまでの生き方に自信が持てない、他)で構成(*逆転項目)。各項目を5件法で評定。

2. 2. 予備調査

A大学の大学生及び大学院生を対象に、家庭内暴力経験・願望質問紙、攻撃の置き換え傾向尺度³⁰⁾、負情

動・身体感覚否定経験認識質問紙への調査を行った(有効回答数153名:男性66名,女性87名,平均年齢21歳,回収率は約91%)。予備調査(2011年6月1日から6月9日に実施)では、質問紙の因子妥当性と信頼性を確認した。

2. 3. 本調査

関東圏内大学の大学生および大学院生412名に、2011年10月6日から11月14日に個別自記入式の質問紙調査を実施(有効回答数391名:男性189名,女性202名,平均年齢20歳,回収率は約96%)。以下は本調査の結果である。

2. 4. 結果

2. 4. 1. 質問紙の妥当性と信頼性の検討

家庭内暴力傾向質問紙9項目について、初期解を主因子法による因子分析を用いて行った結果、1因子構造が妥当であると判断した(表3・表4)。

負情動・身体感覚否定経験認識質問紙は、2因子であることが確認された²⁹⁾。質問紙の作成過程と妥当性信頼性の検証については大河原ら²⁹⁾に記載した。

また、攻撃の置き換え傾向尺度、自己存在感の希薄さ尺度については、先行研究と同様の3因子で十分な信頼性を得た。

2. 4. 2. 仮説の検証

仮説の検証を行うにあたり、家庭内暴力経験質問紙と家庭内暴力願望質問紙を「家庭内暴力傾向質問紙」として扱うために、(1)下位尺度間の関連を相関関係の分析により確認した。そして、(2)負情動・身体感覚否定経験認識、家庭内暴力傾向、攻撃の置き換え傾向、自己存在感の希薄さの関連について、構造方程式モデリングによるパス解析を用いて検討した。

表3 家庭内暴力経験質問紙の因子分析結果(主因子解)

| | I |
|---------------------------|--------|
| 6 家族に暴言を吐いたり、大声で怒鳴ったりする | .81 |
| 2 家族に物を投げつける | .80 |
| 1 家族を叩いたり、蹴ったりする | .77 |
| 3 家族の身体を強くつかんだり、突き飛ばしたりする | .77 |
| 7 家の中の物を殴ったり、蹴ったりする | .76 |
| 4 家族に命令したり、脅したりする | .74 |
| 5 家族を批判したり、嫌がらせをしたりする | .72 |
| 8 家の中の物を壊す | .64 |
| 9 家の中を荒らす | .62 |
| 累積寄与率 | 54.97% |
| α係数 | .92 |

表4 家庭内暴力願望質問紙の因子分析結果(主因子解)

| | I |
|---------------------------|--------|
| 1 家族を叩いたり、蹴ったりする | .86 |
| 3 家族の身体を強くつかんだり、突き飛ばしたりする | .85 |
| 4 家族に命令したり、脅したりする | .82 |
| 2 家族に物を投げつける | .81 |
| 6 家族に暴言を吐いたり、大声で怒鳴ったりする | .80 |
| 7 家の中の物を殴ったり、蹴ったりする | .78 |
| 8 家の中の物を壊す | .77 |
| 5 家族を批判したり、嫌がらせをしたりする | .77 |
| 9 家の中を荒らす | .72 |
| 累積寄与率 | 63.76% |
| α係数 | .94 |

(1) 家庭内暴力傾向質問紙の下位尺度間の関連

下位尺度に相当する項目の平均値及び標準偏差, 下位尺度間相関を算出した。「家庭内暴力経験」尺度得点 (平均: 1.97, SD: 1.05) と「家庭内暴力願望」尺度得点 (平均: 2.04, SD: 1.18) を下位尺度とした。2つの下位尺度は .65 ($p<.001$) と有意な正の相関を示した。

(2) 負情動・身体感覚否定経験認識の影響の検討

負情動・身体感覚否定経験認識が家庭内暴力に及ぼす影響を検討するために, 構造方程式モデリングによるパス解析を行った。負情動・身体感覚否定経験認識が攻撃の置き換え傾向, 家庭内暴力傾向, 自己存在の希薄さの全てに影響を及ぼすこと, 攻撃の置き換え傾向が家庭内暴力に影響を及ぼすこと, 自己存在の希薄さが攻撃の置き換え傾向に影響を及ぼすことを仮定して分析を行った。

その結果, 適合度指数はGFI=.95, AGFI=.91, RMSEA=.077, AIC=148.95であった。負情動・身体感覚否定経験認識が, 攻撃の置き換え傾向と自己存在の希薄さに対して中程度の正の有意なパスを示し, 家庭内暴力傾向に対しては低い値ではあるが有意な正のパスを示していた。また, 攻撃の置き換え傾向が, 家庭内暴力傾向に対して中程度の正の有意なパスを示し, 自己存在の希薄さが攻撃の置き換え傾向に対して低い値の有意な正のパスを示していた (図2)。

2. 4. 3. 家庭内暴力の抑制要因の検討

家庭内暴力の抑制要因を検討するために, 母親から負情動・身体感覚を否定されてきたと認識している, 負情動・身体感覚否定経験認識群において, 自己存在の希薄さ尺度の「対他的次元」因子と攻撃の置き換

え傾向, 家庭内暴力傾向との関係を検討した。

湯川³⁵⁾において, 自己存在の希薄さ尺度は3因子構造が示されている。そのうちの「対他的次元」因子は, 「自分の考えを, 周囲の人は真剣に聞いてくれない」や「自分には気の許せる親しい人たちがいる*」などの, 他者との関係の中で感じる自己存在感についての項目である。

つまり, この得点が高い場合 (高群) は他者との関係について否定的であり, 低い場合 (低群) は肯定的なものであることを示している。

そこで, 他者との関係が攻撃の置き換え傾向と家庭内暴力にどのような影響を与えているのかを検討するために, 湯川³⁵⁾で示されている「対他的次元」因子に注目した。そして, 湯川³⁵⁾の因子構造をもとにして, 「対他的次元」因子の信頼性・妥当性の検討を行うため, 「対他的次元」の9項目 (項目14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 23, 24) について, 初期解を主因子法による因子分析を用いて行った。その結果, 固有値の減衰状況は3.98, 1.02, .89…であり, 再度1因子を仮定して主因子法による因子分析を行った。また, α 係数は.84だった (表5)。この結果から, 「対他的次元」を1因子構造として判断し, 以降の分析に使用することとした。

そして, 負情動・身体感覚否定経験認識群における, 対他的次元高低群の差の検討を行なうために, 攻撃の置き換え傾向得点と家庭内暴力傾向得点についてt検定を行った (表6)。その結果, 攻撃の置き換え傾向については, 対他的次元得点が高い群は低い群に比べて有意に高い得点を示していた ($t(186) = -2.37, p<.05$)。家庭内暴力傾向については, 対他的次元得点高低群の差は有意ではなかった ($t(186) = -1.07,$

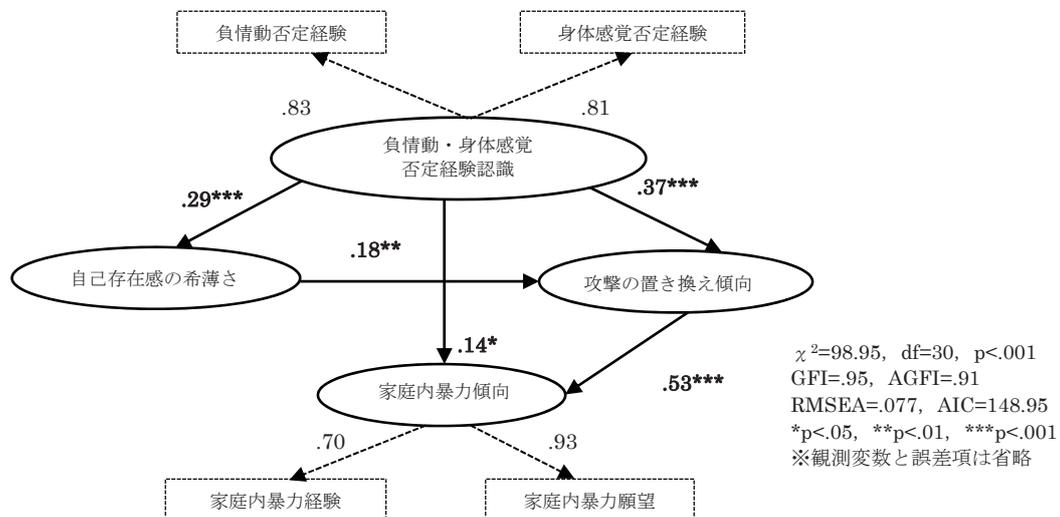


図2 負情動・身体感覚否定経験認識の影響

表5 DSSS「対他的次元」項目の因子分析結果(主因子解)

| | I |
|---------------------------------|--------|
| 14 自分は他人に必要とされている人間だと感じる* | .75 |
| 18 自分を必要としてくれている人間などいない | .69 |
| 19 自分は親しい仲間たちの中で欠くことのできない存在である* | .68 |
| 15 自分のことを尊重してくれる人は少ない | .66 |
| 16 周りの人は、自分のことを信頼してくれているだろう* | .64 |
| 17 周囲の人は自分のことを理解してくれている* | .59 |
| 20 自分の考えを、周囲の人は真剣に聞いてくれない | .50 |
| 23 自分は友人や家族などの期待にこたえていると思う* | .47 |
| 24 周りの人は自分を一人前に扱ってくれない | .46 |
| 累積寄与率 | 37.64% |
| α係数 | .84 |

表6 対他的次元高低群別のt検定結果

| | 自己存在感の希薄さ(対他的次元) | | | | t 値 |
|-----------|------------------|------|------|-----|--------|
| | 高群 | | 低群 | | |
| | 平均 | SD | 平均 | SD | |
| 攻撃の置き換え傾向 | 2.84 | .62 | 2.63 | .64 | -2.37* |
| 家庭内暴力傾向 | 2.34 | 1.19 | 2.17 | .98 | -1.07 |

*p<.05

n.s.)。つまり、他者関係を否定的に捉えている場合ほど、攻撃の置き換え傾向が強くなることが示された。

3. 考察

3. 1. 仮説の検証について

負情動・身体感覚否定経験認識から、自己存在感の希薄さおよび攻撃の置き換え傾向を介して、家庭内暴力傾向に影響を与えるという結果が得られ、母から負情動・身体感覚を否定されてきたという認識によって、怒り感情の制御が困難となり、その状態において攻撃が置き換えられると、家庭内暴力という過覚醒反応の行動につながる可能性が示唆された。

母から負情動や身体感覚の表出をどのように扱われてきたかということは、個人の感情の扱い方や自己存在感の形成に大きな影響を与える。否定的なコミュニケーションは愛着システムの機能不全をもたらし、怒り感情の制御が困難な状態を形成するといえる。この結果は、東京都(編)³³⁾の報告において、親として子どもに向き合い喜怒哀楽を共にするなどの情緒的、精神的な親子関係が希薄であると、親が子どもの同一化の対象にならないため、親からの心の支えが得られずに子どもは自分の存在感が持てない状態となると述べられていることと一致する。

そして、藤・湯川⁹⁾は、「暴力や攻撃の問題の背景として、満たされない自己の在り方が存在して」おり、自己の満たされなさは、自己不満や自己不安などのネ

ガティブな感情を生み、自己の存在認識の希薄化を媒介して敵意的認知傾向を高めるとしている。感情制御と攻撃行動の関係の強さについて多くの先行研究でいわれていることや、湯川³⁵⁾の研究において、自己存在感の希薄さは、敵意や怒りなどの非表出性の(内的な、潜在的な)攻撃と正の相関があることが示されていることから、自己の存在を肯定的に捉えられないことで、怒り感情と攻撃行動の制御が困難な状態となるといえる。つまり、自己の存在に対する感覚が個人の感情制御力、そして攻撃行動の制御力へ影響を与えていると考えられる。

また、表出された攻撃行動が源泉ではない他の対象に向けられる、「やつ当たり」に相当する置き換えられた攻撃」は、家庭内暴力と強く関係すると考えられており³¹⁾、子どもの家庭内暴力の背景には、親子関係の中で負情動・身体感覚の否定されるようなコミュニケーションが展開されており、このようなコミュニケーションの中で子どもは自己の存在を感じられなくなり、適切な感情表現力も身につかないため、怒り感情の制御が困難な状態となっているという可能性が示された。

大河原の感情制御の発達不全モデル^{25) 26) 27) 28)}では、乳幼児期からの母子のコミュニケーション不全が負情動に対する対処方略としての解離様式を獲得させ、それが個の脆弱性の基盤としてその後の適応状態と深く関係する。そしてその後の問題増幅システムの中でのさまざまな悪循環を経て、青年期の問題へと発展する

と想定されている。本研究により、母からの負情動・身体感覚否定経験認識は、自己存在感の希薄さや攻撃の置き換え傾向を媒介として家庭内暴力傾向と関係するという結果は、大河原の感情制御の発達不全モデル^{25) 26) 27) 28)}の妥当性を実証的に担保する結果であったと言える。

3. 2. 家庭内暴力の抑制要因について

仮説の検証により、自己の存在を肯定的に捉えるためには、母親に負情動や身体感覚の表出を受け入れてもらうという経験が重要な役割を果たし、さらに怒り感情と攻撃行動の制御を高める可能性が示された。しかし、どのような要因があれば、家庭内暴力に至らないのかを明らかにするため、自己存在感に焦点をあてて、抑制要因について分析した。

自己存在感の希薄さ尺度の下位尺度である「対他次元」は、「自分の考えを、周囲の人は真剣に聞いてくれない」や「自分には気の許せる親しい人たちがいる*」などの、周囲の他者との関係についての項目である。この得点が高い場合（高群）は他者との関係について否定的に捉えており、低い場合（低群）は肯定的に捉えていることを示している。そこで、負情動・身体感覚否定経験認識群において、攻撃置き換え傾向と家庭内暴力傾向得点の、「対他次元」の高低群差を検討した。その結果、攻撃の置き換え傾向得点について、対他次元の高低群差が認められ、対他次元得点の高群が低群に比べて有意に高かった。また、家庭内暴力傾向については有意差がみられなかった。

これは、負情動・身体感覚を否定されてきたと認識していても、その後の他者との関係を肯定的に捉えていることによって、攻撃の置き換え傾向が低くなることが考えられる。また、負情動・身体感覚否定経験認識は、攻撃の置き換え傾向を介して家庭内暴力に影響を与えているため、直接関係が示されなかったと考えられる。つまり、母親から負情動・身体感覚を否定されてきた経験があっても、他者との関係において自分の存在が受け入れられていると思えるようになることで、怒り感情と攻撃行動の制御力を高めることができるという援助の可能性が示唆された。

4. 今後の課題

本研究において測定された攻撃性は、質問紙調査の特性から、個人が意識化できている側面のみを扱ったものであった。暴力をふるいたくなくと思っているにも関わらず、解離状態にあるために暴力をふるってし

まうケースなどについては、十分に検討できていない。

また、家庭内暴力は、父親やきょうだいとの関係など家族システムにおける機能不全が重要な要因として考えられるが、今回の調査は、個人内要因にのみ焦点をあてたものであった。さらに青年期における父親との関係が家庭内暴力傾向にどのような影響を与えるのかなど、今後の課題である。

付記：本稿は第2執筆者の指導の下に、第1執筆者が東京学芸大学大学院修士論文（平成23年度）として提出したものをまとめ直したものである。調査にご協力いただいた皆様へ、この場を借りて心より感謝を申し上げます。

引用文献

- 1) 青木憲樹：キレる生徒についての一考察（第2報）桐生短期大学紀要, 17, 43-48, 2006.
- 2) Borjesson, W. I., Aarons, G. A., & Dunn, M. E.: Development and confirmatory factor analysis of the Abuse Within Intimate Relationships Scale. *Journal of Interpersonal Violence*, 18, 295-309, 2003.
- 3) Buss, A. H.: *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman, 1980.
- 4) Buss, A. H., & Perry, M.: The aggression questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 452-459, 1992.
- 5) Denson, T. F., Pedersen, W. C., & Miller, N.: *The Displaced Aggression Questionnaire*, 2006.
- 6) Dollard, J.: *Hostility and fear in social life*. *Social Forces*, 17, 15-26, 1938.
- 7) Dollard, J., Doob, L. W., Miller, N. E., Mowrer, O. H., & Sears, R. R.: *Frustration and aggression*. New Haven, CT: Yale University Press, 1939.
- 8) 榎木博明：「自己」の心理学 自分探しへの誘い サイエンス社, 1998.
- 9) 藤桂・湯川進太郎：満たされない自己が敵意的認知と怒り感情に及ぼす影響 カウンセリング研究, 38, 22-32, 2005.
- 10) 藤本修（編）：暴力・虐待・ハラスメント 人はなぜ暴力をふるうのか ナカニシヤ出版, 2005.
- 11) 細田絢・田蔦 誠一：中学生におけるソーシャルサポートと他者への肯定感に関する研究 教育心理学研究, 57, 309-323, 2009.
- 12) Hovland, C., & Sears, R.: *Minor studies of aggression: VI. Correlation of lynchings with economic indices*. *Journal of*

- Psychology, 9, 301-310, 1940.
- 13) James, W.: Psychology; The briefer course, 1892; 今田寛 (訳) 心理学 上下 岩波文庫, 1993.
 - 14) 川畑友二: 暴力を振るう子どもの心理 児童心理61 (15), 20-36, 2007.
 - 15) 清永賢二 (編): 現代少年非行の世界 —空洞の世代の誕生— 少年非行の世界 —空洞の世代の誕生, 有斐閣選書, 1-35, 1999.
 - 16) Kant, I.: Kritik der Reinen Vernunft, 1787; 篠田英雄 (訳) 純粹理性批判 上中下 岩波文庫, 1962.
 - 17) Markus, H. & Nurius, P.: Possible selves. American Psychologist, 41, 954-969, 1986.
 - 18) 南澤信之・山崎保寿: 高等学校における生徒指導問題の心理的特徴に関する考察 —生徒指導事例 (暴力行為) の分析を通して— 信州大学教育学部附属教育実践センター紀要 教育実践研究, 1, 11-18, 2000.
 - 19) 落合良行: 孤独感の内包的構造に関する仮説 教育心理学研究, 30, 233-238, 1982.
 - 20) 大河原美以: 小学校における「きれる子」への理解と援助 —教師のための心理教育という観点から—, 東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第26集, 141-151, 2002.
 - 21) 大河原美以: 小学校における「きれる子」への理解と援助 (2) —22例の分析からみた「問題のなりたち」—, 東京学芸大学紀要 第1部門教育科学, 第54集, 103-110, 2003.
 - 22) 大河原美以: 小学校における「きれる子」への理解と援助 (3) —解離状態の子どもへの治療援助技法—, 東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第27集, 11-25, 2003.
 - 23) 大河原美以: 怒りをコントロールできない子の理解と援助: 教師と親の関わり, 金子書房, 2004.
 - 24) 大河原美以: 親子のコミュニケーション不全が子どもの感情の発達に与える影響 —「よい子がきれる」現象に関する試論—, カウンセリング研究, 37, 180-190, 2004.
 - 25) 大河原美以: 子どもの心理治療にEMDRを利用することの意味 —感情制御の発達不全と親子のコミュニケーション—, こころの臨床アラカルト, 27 (2), 293-298, 星和書店, 2008.
 - 26) 大河原美以: 子どもの「感情制御の発達不全」と治療援助の方法論, 平成21年度東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士学位論文, 2010
 - 27) 大河原美以: 教育臨床の課題と脳科学研究の接点 (1) —「感情制御の発達不全」の治療援助モデルの妥当性—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第61集, 121-135, 2010.
 - 28) 大河原美以: 教育臨床の課題と脳科学研究の接点 (2) —感情制御の発達と母子の愛着システム不全—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第62集, 215-229, 2011.
 - 29) 大河原美以: 母からの負情動・身体感覚否定経験認識質問紙の作成 —因子妥当性と信頼性の検証— 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第64集, 163-169, 2013.
 - 30) 淡野将太: 攻撃の置き換え傾向尺度 (DAQ) 日本語版作成に関する研究 教育心理学研究, 56, 171-181, 2008a.
 - 31) 淡野将太: 攻撃の置き換え傾向とTDAパラダイムにおける攻撃評定の関連 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部, 第57号, 221-224, 2008b.
 - 32) 淡野将太: 置き換えられた攻撃研究の変遷 教育心理学研究, 58, 108-120, 2010.
 - 33) 東京都 (編): キレル —親・教師・研究者・そして子どもたちの報告— ブレーン出版, 1999.
 - 34) 山中康裕: 親に暴力をふるう子どもの心がわかる本 講談社, 2008.
 - 35) 湯川進太郎: 自己存在感と攻撃性 —自己存在感の希薄さ尺度の信頼性と妥当性の検討— カウンセリング研究, 35, 219-228, 2002.

母からの負情動・身体感覚否定経験が攻撃性に及ぼす影響

—— 家庭内暴力傾向との関係 ——

The Effect of Invalidation of Negative Emotion and Somatic Sensation by Mother on Aggression

—— Relation to Family Violence ——

福 泉 敦 子*・大河原 美 以**

Atsuko FUKUIZUMI and Mii OKAWARA

教育心理学講座

Abstract

The purpose of this study is to develop “Family Violence Questionnaire” that measures experience and wish of family violence, and to verify relation among “invalidation of negative emotion and somatic sensation by mother”, “displaced aggression” about control of anger and aggression, and “diminished sense of self-existence”. The results suggested the following ; 1) Invalidation of negative emotion and somatic sensation by mother and control of anger and aggression are important factors of family violence. 2) Even if children have been invalidated negative emotion and somatic sensation by mother, they can control their aggression by having self-existence in a subsequent relation with the others.

Key words: family violence, parent-child relationship, negative emotion, somatic sensation, aggression, self-existence

Department of Educational psychology, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本研究の目的は、家庭内暴力の経験と願望を測定する「家庭内暴力傾向質問紙」を作成し、「母からの負情動・身体感覚否定経験認識」、怒り感情と攻撃行動の制御に関する「攻撃の置き換え傾向」、「自己存在感の希薄さ」との関係性を検証することである。その結果、母親からの負情動・身体感覚の否定と、子どもの怒り感情と攻撃行動の制御が、家庭内暴力の重要な要因となる可能性と、母からの負情動・身体感覚の否定経験があった場合でも、その後の他者との関係において自己の存在を感じることで攻撃性の制御が高くなることが示された。

キーワード: 家庭内暴力, 親子関係, 負情動・身体感覚, 攻撃, 自己存在感

* Adachi City Child & Family Support Center (1-5-17 Higashi-Ayase, Adachi-ku, Tokyo, 120-0004, Japan)

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)